

## 「対話」と「圧力」、その来歴

しばたはる（波止場てつがくカフェ）

### 1、「圧力」の“元祖”

「必要なのは、対話ではない。  
圧力なのです。」[1]

この日本国の最高権力者より  
発せられた言葉の何たるかを考  
えたとき、頭に浮かんだのは、  
ある哲学者の名であった。1 気  
圧=1013.25hPa。[2]今も「ヘク  
ト・パスカル」の単位にその名  
を留めているブレーズ・パスカ  
ルは、自然科学者や数学者（そ  
して信仰者）としても功績を残  
した人物である。

密閉容器中の流体は、その容器  
の形に関係なく、ある一点に受  
けた単位面積当りの圧力をその  
ままの強さで、流体の他のすべ  
ての部分に伝える。[3]

自動車のブレーキや油圧式ジ  
ャッキなど、流体力学の基礎理  
論として。「パスカルの法則」は  
現代文明を支えるのに欠かせな

い発見として知られている。だが  
しかし、当時の議論の中心は「流  
体」をどのように操作すること  
が可能か、ということではなか  
った。パスカルの生きたヨーロ  
ッパ近世社会にあつて論争の的  
となっていたのは「真空状態」  
が存在するのかどうかという問  
題であり、伝統的アリストテレ  
ス学派は、自然による<空虚の  
恐怖>が存在するために真空は  
存在しない、という主張を展開  
していた。[4]この時代、この手  
の論争が純粋な「科学論争」と  
して成立することは、あり得な  
い。科学的「事実」についての  
見解の違いは、カトリック教会  
や王権体制との関係を抜きには  
考えられない“政治的”なイシ  
ューとして存在していただろう。  
[5]

### 2、パスカルの「対話」観

ところで、科学者としてのパ  
スカルをそのような背景の下に

眺めてみると、そしてパスカル後年における、無神論に対する「護教者」としての展開を考えるならば尚更、彼にとって「対話」とは、果たしてどのようなものであったのかということが気になってくる。

大田孝太郎は、「稀代の論争家」としてパスカルを、ソクラテスの「対話術」、ソフィストの「弁論術」と比較しつつ、キリスト教護教者としての「説得術」の展開者として説明する。[6]ここで注目したいのは、あくまで「論理的必然性」に即して展開されるべき「対話」がしかし、一方当事者である「説得者」の立場からすれば、相手の「心情」が考慮されなければならないものとして措定されていることである。

「ソクラテスの「対話術」とパスカルの「説得術」の共通するところは、両者とも、「論理的必然性」にもとづく「真実の探求」である。しかし両者が決定的に違うところは、ソクラテスにあっては論理的な説得が究極のものであるのにたいして、パスカルの場合は、論理的説得にくわえて、説得する相手の「心情」にも訴えかけないと、真の意味で「説得術」は完全なものとはなりえないのである。」[7]

一般的な意味を考えたとき、「対話」と「説得」は、かなりニュアンスの異なる言葉として感じられる。少なくとも、「説得」には説得者の意図があり、それは何らかの目的を持って展開されるものだろう。対して「対話」という言葉はまず、「説得」に比べれば意味が広く、包摂的である。仮に「対話」の意味を限定的に理解するにせよ、「説得」にあるような積極的な志向性がない。そしてこの「対話」という言葉に漂う謙抑性を考えるならば、むしろそれは全く反対の性質を意味する言葉としてすら感じられてくる。もちろん、パスカルの目的とは何かとなれば、それは「キリストへの帰依」ということになるのだろうが、しかし、ここで「説得術」として説かれているものが、「日常生活の対話から生まれた思想」であるのだと説明されるのだとしたら、さて、どうだろう。

大田によれば、パスカルは、

日常生活の中で具体的に生きている人間に対する観方は、「原理と証明」に基づく数学や自然科学（物理学）の方法とは根本的に異なることをパスカルは初発からはっきりと自覚していた

[8]

のだという。そして大田は、続けて『パンセ』の次の一説を引用する。

「精神はそれみずからの秩序をもっていて、それは原理と証明とによるものであるが、心情にはそれとは別な秩序をもっている。人は愛の諸々の理由を秩序立てて説明することによって、愛されるべきであるということを実証しはしない。そんなことをしたら笑うべきであろう。」  
(B283)

[8]

「愛」を秩序立てて説明せんと根拠を求めようとすれば、対話は（おそらくは）無限後退へと陥らざるを得ない。ここで槍玉に挙げられているのはデカルトだということであるが、自然科学仕込みのそうした論証方法とは違って、「心情」の問題は「別な秩序」をもっているという前提から、「説得術」に理があるのだと説かれているのである。これは、「対話」ということの「実際」を考えると、大変示唆的なことであるとは言えないだろうか？

ところで対話とは、パスカルの言うとおりの「説得」として、相手の心情を窺いながら行われ

るべきものであると考えるならば、それはいよいよ「圧力」とは全く異なる意味をもつ言葉として立ち現れてくると思われる。

### 3、「圧力」の変貌

パスカルに倣い、「対話」とは「説得」として現象すべきものであるのだとして、さて、「圧力」の方はどうだろうか？

パスカルによって証明された大気圧の存在は、その後気象にとどまらない科学技術全般の発展をもたらした。ガリレイや、それに後続したトリチェリは、パスカルに先立って大気圧の存在を予感せしめた自然科学者であったが、両者の研究に共通して見られたものが、シリンダーとピストンという組み合わせであった。これは「科学」というより「技術」として扱われるべき領域の事柄であろうが、このシリンダーとピストンという組み合わせは、その後ホイヘンスによって大気圧を用いた揚水ポンプとして研究されていく。科学の発展が技術を変え、技術における発見によって科学が進展する——。そうして大気圧の発見は、「圧力」の操作へと変貌をしていくのである。パパン、セバリ、ニューコメント、蒸気の採用によって揚水技術は急速に

発展を遂げ、ワットにおいて蒸気機関として完成をみる。[9]気圧の発見をきっかけに人類は、様々な「動力」、まさに対象を動かす「力」を手に入れていたのである。

思えば 2011 年に引き起こされた福島第一原発事故においても、私たちが固唾を飲んで注視していたのは原子炉「圧力」容器の状況であった。現在でもテレビに映る圧力容器の模図は、水銀柱 (!) の昇降する温度計と同じ形をして描かれる。これは偶然のことではあるだろうが、所縁のないことではないように思える。

「原子炉」という、科学技術の“ひとつの”到達点に「圧力」の二文字があることを考えるとき。人類が大気圧について知識を得たことは、まさに近代科学技術の発展という「道」のど真ん中に連なるものであったのだと、言わざるを得ない。「圧力」について理解すること。そしてそれを制御し、利用することで、自己に都合のよい環境を実現し、支配すること。今日、「圧力」の文字が持つ意味は、単にそれを現象として「知る」ということに留まらない。それは、もっと全く別次元の意味を持っているのである。

## 4、「対話」の放棄と「圧力」への置換

「必要なのは、対話ではない。圧力なのです。」 [1][10]

2017 年 9 月 21 日。内閣総理大臣たる安倍晋三は、ニューヨークで行われた国連総会の一般討論演説にて、このようにスピーチを行った。

「辛抱強く、対話の努力を続けた」 [1]

「これをもたらしたのは、対話の不足では、断じてありません。」 [1]

NPT (核拡散防止条約) に違反してのプルトニウム抽出やウランの濃縮。IAEA 脱退を示唆しながら手に入れた原子力発電軽水炉の提供と重油や食料の支援。人工衛星=ミサイルの度重なる発射と地下核実験による水爆の開発。軍事的緊張を極度に高めながら一転、劇的に妥協へと踵を返してみせることで、最大限の外交的利益を引き出すことを狙った朝鮮民主主義人民共和国の「瀬戸際外交」は、六ヶ国協議の枠組みなどを通じて行われてきた「対話」の傍らで幾度となく繰り返されてきた。そして

ICBMの開発による「核弾頭搭載ミサイル」の完成という現実を前にして、安倍は次の様な総括を行う。

「対話とは、北朝鮮にとって、我々を欺き、時間を稼ぐため、むしろ最良の手段だった。」[1]

「対話による問題解決の試みは、一再ならず、無に帰した。」[1]

そうして導かれたのが、「必要なのは、対話ではない」との結論であり、「圧力」一筋の採用であった——。[11]

圧力も「対話」（あるいは「説得」）も、ともに「知」より出でたものではなかったか。対象を「知る」ことに向けられたその挙動は、しかし結局は対象を支配し、自在に操作するための技術として収斂していく。パスカルを前にして、皮肉という以外に言葉が見つからない。

### 5、＜抵抗力＞と葦

パスカルによる大気圧の証明は、人間に「圧力」の利用へと道を拓くものであった。大気圧の存在を知るより以前。「天気をうかがう」ぐらいがせいぜいであった人類は、気象を読み、「圧力」を操ることで、今や自己に

都合のよい環境を作り出すことに躍りとなっている。しかし一方で、思い出したいこともある。

パスカルによる大気圧の証明は、同時に、気圧に晒される対象が、それに対して同等の値にて応えているのだという、＜抵抗力＞の存在を証明するものでもあった。わたし達の身体は、常に気圧に対して抵抗している。たとえその場の「対話」がどのような「気圧」の下にあったとしても、事実として、わたし達には＜抵抗力＞が備わっているのである。そしてわたし達は、あるいは相手の「抵抗力」を測りつつ、「説得」的態度で相手に対話を求めるのかもしれない。

### 347

人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一適の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。

だから、われわれの尊厳のす

## 論考の扉

べては、考えることのなかにある。われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって、われわれが満たすことのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。[12]

考える葦は、同時に「抵抗する葦」でもあるのではないか。そして「抵抗する葦」とは、まさにその<抵抗力>を足がかりとして、自己以外の者に対して、その「心情」に配慮しながら、それに受入れられるべく「説得」的に対話を試みることができる存在なのではないだろうか。然らば、「圧力」をもって「対話」に置換させる手法とは、「葦」たる人間の性質そのものに背くものであると言わざるを得ない。

私は日本政府による「対話」の放棄に反対し、強い非難を表明するものである。

### 5、追記

2017年9月20日の国連総会における演説に関して、翌年3月26日、安倍内閣総理大臣は、参議院予算委員会において以下のように答弁した。

「まず最初に、私は、北朝鮮の問題の解決のために圧力一辺倒で対話を否定したことはないわけでありまして、非核化を前提に北朝鮮から対話を求めてくる状況をつくる、そのためには圧力を掛け、抜け道は許さない、こう申し上げたわけですが、だからこそ北朝鮮の側から対話を求めてきたと、このように考えております。」[13]

だが、この言葉を、字義通り受け取るわけにはいかない。[14]重要なことは、安倍によって発せられた маниフェストが、「対話の放棄」の宣言に他ならないということである。そしてそれは南北首脳会談、その後の米朝首脳会談・共同宣言の発表という具合に、危機からその回避へと国際情勢が劇的に変化を遂げた（といわれる）現在でも全く有効に機能していると、私は考える。問題は、その言説がもたらしている「現実」にある。

「必要なのは、対話ではない。圧力なのです。」[1]

この言葉は、「対話」を実践しようとする全ての者に対して向けられた命題である。安倍の発したこの言葉を、決して看過してはならない。「対話の放棄」

以外の何ものでもない日本政府のこの宣言は、撤回されるべきものである。

### \*\*\* 注 \*\*\*

[1] 内閣総理大臣・安倍晋三 “第 72 回国連総会における安倍内閣総理大臣 一般 討 論 演 説 ” . 首 相 官 邸. 2017-9-20.

[http://www.kantei.go.jp/jp/97\\_abe/statement/2017/0920enzetsu.html](http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/statement/2017/0920enzetsu.html)

[2] 1 気圧を「標準気圧」と定め、それを「平均気圧」であると看做す場合の基点がパリであるということは、強調してもし過ぎたということのない問題である。

[3] 金沢工業大学ライブラリーセンター、ブレーズ・パスカル (1623-1662) 液体の平衡及び空気の質量の測定についての論述 パリ, 1663 年, 初版.  
<http://www.kanazawa-it.ac.jp/dawn/166301.html>

[4] 大出昇. “物理学者パスカル—近代科学思想形成史の一断面—”. p24. 創価大学人文論集 4. 1992-03. 創価大学人文学会

[5] パスカルの生年は 1623 年。パスカルに先立って真空論争に関わったガリレイは、1616 年、ローマ教皇庁により地動説を咎められ、異端尋問の結果、軟禁に処された。

[6] 大田孝太郎. “パスカルにおける「対話」と「説得」” 広島経済大学研究論集代 40 巻第 2 号. 2017 年 9 月  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hue/file/12291/20180312154826/kenkyu2017400202.pdf>

[7] 同 p27

[8] 同 p24

[9] 中山秀太郎. 『機械発達史』. 1987. 大河出版

[10] “What is needed to do that is not dialogue, but pressure.”

この演説の英語訳においては、「対話」の語は「dialogue」として訳されている。

Prime Minister Shinzo

Abe. “Address by Prime Minister Shinzo Abe at the Seventy-Second Session of the United Nations General Assembly”. Prime Minister of Japan and His Cabinet. September 20, 2017

[https://japan.kantei.go.jp/97\\_abe/statement/201709/\\_00010.html](https://japan.kantei.go.jp/97_abe/statement/201709/_00010.html)

[11] 「対話」という言葉については、おもに大韓民国や中華人民共和国に対して、あるいは外交一般の理念を表すものとして、安倍は以下のように発言している。ここには「圧力」の語が見えないが、果たしてどうだろうか。

・「対話のドアを常にオープンにし、あらゆるレベルで対話を通じて協力を深めていくよう、努力を進めてまいります。」

(内閣総理大臣・安倍晋三 “日韓・韓日議員連盟合同総会開会式における安倍総理発言”. 首相官邸 . 2013-11-29

[https://www.kantei.go.jp/jp/96\\_abe/actions/201311/29nikkan.html](https://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/actions/201311/29nikkan.html))

・「私の対話のドアは、常にオープンです。」

(内閣総理大臣・安倍晋三 “第百八十三回国会における安倍内閣総理大臣施政方針演説”. 首相官邸. 2013-2-28  
[http://www.kantei.go.jp/jp/96\\_abe/statement2/20130228siseuhousin.html](http://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/statement2/20130228siseuhousin.html))

・「対話のドアは閉ざしてはなりません。」

## 論考の扉

---

ん。」

(“内外記者会見・安倍総理冒頭発言”. 首相官邸. 2014-3-25 [http://www.kantei.go.jp/jp/96\\_abe/statement/2014/0325naigai.html](http://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/statement/2014/0325naigai.html))

[12] パスカル『パンセ1』前田陽一・由木康訳. 2001. 中央公論社

[13] 予算委員会(米国の核態勢に関する日米協議②). 国会質問. 日本共産党参議院議員 井上哲士 HP より <http://www.inoue-satoshi.com/parliament/2018/03/post-320.html>

[14] もちろんこの答弁は、安倍が(国際情勢の変化などによって)「対話を否定したことはない」との説明を余儀

なくされた、というように考えることもできるだろうが、そうした解釈については、本稿の関心とするところではない。ところで、そもそもこの支離滅裂な説明をどのように解析すればよいのだろうか。「対話」と「圧力」の語は、ここではパスカルの法則以上の普遍性と一般性をもって融通無碍・千変万化しているように見える。

参考文献

・鹿島茂. 「NHK100分de名著」ブックス『パスカル パンセ』. 2013. NHK出版